

和光会会報No. 55

－菱電サービス（菱サ）～三菱電機ビルテクノサービス（MELTEC）本社OB会－

◆ 拝み小屋から始まった(北海道開拓に想う)

…… (2018-09) —山本拓弘さんから投稿頂きました—

今年は北海道という名が使われるようになって150年の節目だという。自分は北海道を旅するようになって20年近くとなるのだが、未だこの地方の開拓の来し方などに関心を向けたことは無かった。北の大地の清新な空気を胸一杯に吸い、味わいながら好きな遊びを楽しみ、多くの知人を得て楽しみの時間を共有するばかりだった。そのような自分なのだが、今年は節目だという話を北海道在住の知人から聞いて、彼が道名の名付け親である松浦武四郎の故郷である伊勢の松阪の生家を訪ねたいと考えていると話すのを聞いて、昨秋松坂のその傍を通りながら大した関心も示さないまま通り過ぎてしまったことを思い出し、恥ずかしさがこみ上げたのだった。

そこで思い立ったのは、家内と暮らしを共にし始めて今年が50年の節目を迎えるのと合わせて、少し時間をかけて北海道各市町村の来し方を可能な限り訪ねる記念の旅をしてみようということだった。北海道には現在179の市町村がある。それらの全てを訪ねるのが不可能なことは承知しているのだが、ネットなどで簡便的に情報を集めるのではなく、自分の足で各地の郷土館や博物館或いは役場等を訪ねて、その歴史の記録と現在の様子を確認してみようと思った。

5月の下旬に家を出発して、9月の中旬くらいまで、凡そ3カ月半ほどの行程で可能な限り多くの場所を訪ねようと考えた。その為には事前の調査（これを自分は旅の前楽と呼んでいる）も大切で、全道の大地図を部屋に貼って毎日それを眺めながら、併せて何種類かの地図や資料を毎日覗きながら、北海道の支庁といえる14の振興局・総合振興局毎の市町村の幾つかのデータを集めたりして、この作業だけで早くも北海道を一周した気分となった。基本項目として人口、面積、地理等を調べてみた。自分の住む守谷市などとは比較にならないデータも多くて、北海道の市町村には想像以上の格差というか違いがあることを改めて思い知った。あとは現地に行ってみて実際のどのようなものかを確認する楽しみだけである。

さて、というようなことで旅を開始したのだが、まずは函館に上陸して、渡島エリアから開始することにした。その後、檜山エリア、後志エリア、胆振エリア、空知エリア等々訪問の順序は多少前後しながらも道南から道央、道東、道北とほぼ全エリアの市町村を訪ねた。それらの一々をここに書くことは不可能だし、今これを書いているのも旅の帰還途中のフェリーの中であり、各地で得た様々な情報や資料のまとめにも手をつけていない。このあとこの膨大なデータをどう咀嚼し活用して旅の後楽を楽しむかもこの後の課題なのである。

そのような状態の中にあるのだけど、今この100日以上をかけた旅の来し方を思う時、最も印象に残った感慨といえば、次のようなことであろう。

北海道の開拓というのは、決して美しいことばかりではないということ。成功よりも数倍の挫折に支えられて成り立って来たということ。新天地を求めて北の大地にやってきた人たちは、大自然のあまりにも巨大なパワーに圧倒されて、開拓どころか生きる自信を失った人が数え切れないほどいたのである。大地にへばりついて初志を貫徹できる人はそれほど多くは無かったといえよう。

北海道の開拓に最大の貢献をしたのは、もしかしたら罪人即ち囚人だったのかもしれない。明治初期は不安定な世情の時代であって、それを抑えるために為政側に立つ者は、その思想や方針に反対する者を容赦なく罪人化することにためらいが無かったのである。そして、集治監と呼ばれる刑務所に収監された囚人は、開発のためのインフラとなる道路の建設に駆り出され、情け容赦なく過酷な労働を強いられたのである。倒れた者は、そのまま路傍に捨て置かれ、弔いもしなかったという。このような人たちの貢献に支えられて、その後の開拓が進展したことなどを知るにつれて、開拓というものの凄まじさを思い知らされた感じがした。

そして、最もショッキングだったのは、拝み小屋といわれる開拓のためのいわば前進基地ともいえる粗末な住居を知ったことである。その小屋を再現して展示している郷土資料館はそれほど多くは無かったけど、それを取り上げていなくても北海道の開拓の原点はこの小屋にあるのだということを強烈に感じた。細い丸太を使った柱の骨組みに、萱や笹の葉、イラクサ等を被せて葺いて屋根の代わりにして、地べたの中央に囲炉裏を掘っただけの粗末な住居は、縄文時代の竪穴式住居よりもレベルの低いものに思えた。このような小屋の中で、一体厳寒の冬をどう乗り越えたのだろうか。又、夏になれば、多くの害虫の群れ飛ぶ環境の中で、いったんどのような知恵を働かせて日々を送ったのだろうか。現代の感覚では、想像もできない厳しさである。恐らく木を切り倒し、その処理が可能な期間だけの臨時の住まいだったのだと思うけど、それにしても余程の心身のパワーがなければ耐えられるものではない。拝みというの、思うに合掌という意味であり、小屋の形が合掌造りの建物の三角形の上部に似ているからなのか、或いは思わず拝みたくってしまふほどの厳しい身の引き締まる小屋だったからなのかもしれない。そう思えるほどの開拓者たちの住まいだった。

この他に北海道では開拓と防衛を期しての屯田兵の制度があり、それが開拓の引き金となっている場所は多いのだが、兵とその家族に与えられる官舎も又板張りの粗末なものだった。しかし、この拝み小屋を知ったあとでは、雲泥の差があることを思わないわけにはゆかなかった。屯田兵の人たちも辛酸を舐めながら開拓に取り組んだことであろう。それは北海道開拓の大きな功績に違いない。

しかし、開拓の原点は何といってもこの拝み小屋にあるのだと、自分は確信した。その後の成功も挫折も全てこの拝み小屋に全エネルギーを注いで開拓に打ち込んだ、そこにあるのだ。今のところこの気づきこそが今回の旅での最大の発見だと思っている。

※現在旅の途中なのだが、原稿の締め切りが迫っていると勝手に思い込んで、フェリーの中でこれを書いている。(2018年9月8日記)



道東オホーツク側に近い西興部村の資料館の中に展示されている拝み小屋。これはレベルの高い方のもので、実際にはもっと粗末な小屋も用いられていた。

◆ 会員の趣味のコーナー

今回から第16回和光会総会の展示作品を3回に分けてご紹介いたします。

今回もこれらを始めた時期(年数)・動機、作品を制作しての喜び(感動)、苦労したこと、「他に取り組んでいる趣味」などを含めて紹介いたします。

なお、出展出来なかった方の作品・趣味についても出来るだけ順次ご紹介をしていく予定です。

◆ 陶芸（4点）

……（2018-06）—金山 幸雄さんから投稿頂きました—

① 黒泥・酸化焼成「六角堂ランプシェード」



奈良を旅行した際春日大社の灯籠を見て、六角型のランプシェードを作ってみようと思いつき、挑戦してみました。ロクロを使わず板状にした土を組み合わせ、格子をイメージした穴を開けて作るのですが、乾燥が不十分だとゆがみが生じるため、乾燥状態のタイミングを見計らって作成いたしました。

ランプ用コードを通すために台の部分を一部はめ込み式にしてあります。

ランプシェードとしてだけではなく香炉としても使えます。六角堂の屋根の上には遊び心で龍の頭をあしらってみました。また、六角堂の壁も変化を持たせるために木目模様を付けております。光沢を出さずに渋い感じを出したいと思いましたが釉薬は使わずに焼き締めています。

② 黒泥・酸化焼成「龍紋様酒器セット」



徳利とぐい呑み2ケ(夫婦用)のセットとして出品してみました。徳利には龍が絡み付いた形を表現し、ぐい呑みには龍の顔を表現してみました。

徳利は瓢箪型にして紐をつけてみました。徳利もぐい呑みも水分を使いますので耐水性を持たせるため内部は釉薬をかけていますが、外側は光沢を抑えて渋い感じを出すよう焼き締めています。徳利内部は透明釉でぐい呑みの内側はなまこ釉を掛けております。ぐい呑みは特徴を出すためにロクロで引いた後に外側を六角形に荒削りし、龍の顔を付けています。

③ 黒泥・酸化焼成「龍紋様菱型香炉」



本体部分は板作りで作成し、香炉としての通気性を高めるため窓を付けています。また、蓋の部分に玉を付けて龍が睨むイメージで作りました。

六角堂ランプシェードと同様乾燥具合の良否でゆがみが出ますので、それを見計らって作成するのに苦労しました。

本体内部は透明釉を掛けていますが、外側は渋い感じを出すために釉薬を使わずに焼き締めで表現しています。

また、外側は菊の模様を押印して変化を持たせています。

④ 備前・登り窯焼成「瓢箪型一輪挿し」



今回の出品作品の中では唯一登り窯で焼成した作品です。登り窯は電気窯やガス窯と違い、4昼夜ぶっ通しで交代交替に薪を炊き続け、更に一週間窯を冷ましてから作品を取り出しますので焼成に大変手間がかかります。

この作品はもう10年以上前に電動ロクロを使わずに手びねりで作ったものです。備前焼は釉薬を使わないで焼成するのですが、この作品は備前焼特有の「棧切り」という鼠色がかった窯変が見られ、気に入っている作品の一つです。

また、作品に特徴を出すためにアクセントとして花模様を付けてあります。

◆ 工芸品・写真

工芸品「竹細工」

…… (2018-06) —和田 昭喜さんから投稿頂きました—

「へら竿 8尺3本継 (総竹製・漆塗り)」



- A 穂先 真竹削り穂
- B 穂持 高野竹
- C 元 矢竹 (握り乾漆仕上げ)

所属会員のへら竿作品 (本漆塗り) に惚れ、レパートリーを増やしたくて自ら作品作りに取り組んだ。平成24年頃から活動。竹細工は子供の頃から肥後守でイタズラしていた。

龍ヶ崎市の文化祭で所属団体の会員として発表・展示。

フィッシングショー (パシフィコ横浜) で孫昭倶楽部の会員として展示。

昨年は製作が間に合わず、今年も苦勞し、オール竹のへら竿を製作。火入れ及び完成後の上げ矯めに苦勞した。

写真 「竿師（へら竿火入れ）」（写真半切額・四つ切ワイド）



写真クラブのテーマが利根町の撮影に限定され、利根町の所属クラブの展示会にて発表。

竿は完成品が評価の対象。製作過程の肝（火入れ）を表現するのに苦労した。

竿作りの生徒として通っている工房の師匠を撮影しました。

◆ 新聞記事

…… (2018-06) —磯田 昇（桂木 俊介）さんから投稿頂きました—

- ①「クルージングで出会った素敵な親子に乾杯」 ②「『官庁とシニア層だけが残る国』への不安」
（東日新聞2018年2月23日） （東日新聞2017年12月6日）

東日新聞 2018年(平成30年) 2月23日(金)

寄稿

人々の心、大分県、地中海・フランス、今後は東洋の海に広がる。クルージングで出会った素敵な親子に乾杯。クルージングで出会った素敵な親子に乾杯。クルージングで出会った素敵な親子に乾杯。

クルージングで出会った素敵な親子に乾杯

クルージングで出会った素敵な親子に乾杯。クルージングで出会った素敵な親子に乾杯。クルージングで出会った素敵な親子に乾杯。

東日新聞 2017年(平成29年) 12月6日(水)

「官庁とシニア層だけが残る国」への不安

「官庁とシニア層だけが残る国」への不安。官庁とシニア層だけが残る国。官庁とシニア層だけが残る国。

◆ 訃報ご報告

E-MAIL 会員各位へは INFORMATION No.167でご連絡申し上げましたが、昭和40年入社の藤次 秀治氏が8月17日ご逝去（享年76）されました。

改めてここに哀悼の意を表し、謹んでご連絡申し上げます。

故藤次 秀治氏は昭和40年4月に入社され、本社業務部エレベータ保守課城南営業所、昭和48年8月本社エレベータ管理部技術課、昭和49年10月本社昇降機本部昇技術部検査課、昭和54年10月本社 総生技術部、昭和59年2月東京西支社ビル部品質管理課、昭和59年10月東京西支社ビル部城西営業所工務課課長、昭和62年10月横浜支社ビル部横浜営業所所長、平成3年10月横浜支社シス営業部営業技術一課課長を経て、平成8年4月本社サービス技術本部 技術管理部特許G副参事、平成11年4月本社技術本部技術管理部 副参事（MTB 出向）。平成12年3月退職されるまで主に昇降機技術部門で活躍されました。

◆ 事務局より

- 和光会会報No.34より「くるま旅くらし心得帖」の山本拓弘氏よりくるま旅について投稿いただいておりますが、今回は2018年9月「北海道の旅」からを投稿いただきました。
今年の北海道は沢山台風の影響を受け雨の日が多く、和光会会報No.54を作成中も雨の日が断続的に続いたようで大変だったと思います。最後に胆振地区地震に会い、もう少し北海道に滞在する予定だったそうですが、ご帰宅を早めたようです。しかも会報のために船中でわざわざ原稿を作成して下さったそうです。

なお、山本拓弘氏の「くるま旅くらし」の最近の様子は下記ブログに載っておりますので是非ご覧ください。

<http://blog.goo.ne.jp/vacotsu8855>

「山本馬骨」で検索しても可能です。

- 会員趣味のコーナーでは第16回和光会総会の展示作品の中から、常連となりました金山幸雄さんの陶芸作品、和田昭喜さんの写真・竹細工、それに加え、久しぶりに磯田昇さんの新聞記事（残念ながら記事の一部しか載せられませんが）3人の方の作品をご紹介します。頂きました。
- 和光会会員名簿は住所・メールアドレス等が載っているので個人情報の観点から送付するのは好ましくないと会社より申し入れがあり送付いたしません。
- 和光会の連絡・問い合わせ窓口について
会社（人事部）の全面的な支援により、OB会事務作業（会員との連絡・通知、1194・カレンダーの送付等）を人事部の委託によりMTBにお手伝いいただいております、MTBの担当は総務・人事支援部（部長：田辺 直樹）で変わりありませんが、第16期より連絡・問い合わせ窓口は下記のとおり変更になっております。

担当：井手 信彰、佐々木 敏行、大澤 淳子

電話：03-3803-8865（代表）

FAX：03-3803-8875

E-mail：meltec-OB-wakokai@mtb.ssg.meltec.co.jp

住所変更等通常の連絡・問い合わせはMTBの上記和光会担当か、和光会事務局（寺門）で済むと思いますが、会社の人事部の窓口は年金・基金を担当している方で次の通りです。

担当：大塚 勝則 SK

電話：03-5810-5392（ダイヤルイン）

FAX：03-5810-5501

E-mail：oheki.katsunori@meltec.co.jp

- ・ 2018年度会費納入対象の方は2004年、2005年、2007年、2008年、2010年、2011年、2013年、2014年、2016年および2018年に入会された方々です。
会報No.50でご連絡したように、対象者宛「1194」「和光会会報」送付時振込用紙を同封いたしましたが、会費「4,000円（2年分）」の振込みが未だの方は次の口座宛振込み賜りたくよろしくお願い申し上げます。

なお、振込用紙を紛失された方は事務局あてご連絡くだされば再度送付いたします。

振込先：郵便局

口座番号：00100-7

口座記号：650896

加入者名：和光会

- ・ E-MAIL 会員各位へは INFORMATION をお送りしておりますが、最近不達が増えておりますので、**メールアドレスの変更時は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ 「和光会会報」・「1194」・カレンダーなどを会員宛送付しておりますが、宛所不在で戻ってくる場合がありますので、**転居・住所表示変更等の場合は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ パソコンのある方は、会報や総会写真を下記和光会ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。**(7月よりホームページのアドレスが変わりました)**

http://www.geocities.jp/meltec_wakokai_hp/

皆様の日頃の活動やグループ活動などのお便り・投稿をよろしくお願いいたします。

2018-10-7 和光会事務局 寺門 三男

029-872-4122 mitsuotera@jcom.home.ne.jp